

杲宝の事相受法とその師について

沼 尻 憲 尚

はじめに

杲宝（一二三〇六～一三六二）は、鎌倉後期～南北朝期の東寺における教学振興の中心人物として知られる学僧であるが、事相面においても、勸修寺流（観智院杲宝方）の開祖となるなど、事教二相に亘って多くの功績を残している。また、杲宝の残した書写本・著述本を確認すると、中年以降は事相面に關するものが多くなるが、これは貞和二年（一二四六）に栄海（一二七八～一三四七）の下で勸修寺流を受けたことが契機となっていると考えられる。それ以外でも多くの聞書・次第類を書き残しており、杲宝は事相面の研鑽にも精力的だったことがわかる。しかしながら、杲宝の事相に關連する先行研究はほとんどなく、生涯における事相全般の様子などはあまり知られていないのが実情である。¹

そこで本論では、杲宝が師事した浄宝・道我（一二八四～一三四三）・栄海（一二七八～一三四七）・性心（一二八七～一三五七）という諸師について触れ、それら諸師の法流と杲宝の受法について論じる。

一、浄法からの受法

・浄宝について

浄宝という人物について詳細は明らかではないが、『土佐国金剛頂寺並最御崎寺々務相伝次第』には「土佐国金剛頂寺並最御崎寺々務相傳次第、自性上人、我寶、淨寶上人、頼堅、淨印上人」と、最御崎寺々務の相伝において我宝（一三二七頃）に続いて浄宝上人（頼堅）の名が確認できる。さらに『大悲王院文書』（建武二年四月一三日の条項）には、十三日乙丑、土佐國衛、最御崎寺淨印ヲシテ寺領室津、潮江二莊ヲ管スルコト故ノ如クナラシム^③

とある。これによれば、建武二年（一三三五）頃には浄宝の後継である浄印が寺務に就いているので、浄宝は少なくとも建武年間以前に最御崎寺寺務であったと推察される。また浄宝は、頼宝・道我とともに我宝最後の口決面授の人物とされるから、我宝の法を継ぐ人物として重要な位置にいたと考えられる。我宝について少し述べておくと、『金剛峯寺諸院家析負輯』巻四（定光院の条項）には、

自性上人

諱我寶。後宇多帝之御宇住當院專爲三密持念之道場。瑜伽行業厥德難測。後移住洛西槇尾山。著述之書數部深述

密教奧旨竝行于世矣^⑥

とあり、我宝はまず後宇多法皇の御宇である定光院に住して、その後に自性院を建立し^⑦、さらに後宇多法皇の勅により、槇尾山平等心王院に転住していることが確認できる。また我宝は、後宇多法皇の下で施行された東寺二季伝法会

のきつかけとなった人物であり、『東宝記』⁸⁾ 卷六には、

應長二（改正和元）年壬子二月廿一日、依道我僧正于時權少僧都、勸發自性上人我寶、創令講心經祕鍵、已剋鎮守八幡宮、未剋西院御影堂、聽衆濟々、異門正道所成群也。同廿七日結願畢、後宇多院有叡感、被成永代御願所、及料所御沙汰也⁹⁾

とある。これによれば、道我の依頼により東寺にて『般若心經祕鍵』を講じていたことがわかる。さらに我宝の法流について述べると、『伝灯広録（統伝灯広録）』¹⁾ 卷七の実賢（一一七六～一二四九）の項には「定誓（清）¹⁰⁾ 加賀ノ僧正大門寺—定融—我寶自性上人¹²⁾」という相承が示されていて、さらに『野沢血脈集』¹³⁾ 卷二にも、

實賢下分流 據東寺相承血脈記并或記出之（中略）

實賢金剛王院流—定清加賀僧正—定融—我寶自性上人—清我 此四人上有槓尾方¹⁴⁾

と、「実賢（一一七六～一二四九）—定清（一一八五～一二八〇）—定融—我宝」という相承が示されている。これは「槓尾方」と称される法流であり、その基づくところは金剛王院実賢となっている。

・我宝から浄宝への伝授

浄宝の法流について考察すると、それは我宝を流祖とする「槓尾流」と呼ばれるもので、これは先に述べた「実賢—定清—定融—我宝」という相承に基づくものである。櫛田良洪博士は我宝—浄宝について、『如法愛染法』¹⁵⁾ に示される「秘口決」の中の血脈を根拠として「勝賢—実賢—定清—我宝—浄宝—浄印」という相承を示されている。

ここに挙げられる実賢は、勝賢（一一三八～一九六）に拜して「三宝院流」の伝法灌頂を受け、さらに賢海（一一六二～一二三七）にも受法して金剛王院第五世となった人物である。この経緯から、実賢以下の相承には「金剛王院流（唯金方）」と「金剛院相伝三宝院流（金三方）」¹⁶の両法脈が継承されるようになり、「金剛院相伝三宝院流（金三方）」は実賢より以下、覚濟（一二二七～一三〇二）・如実（一二〇六頃）・覚智（一二四八頃）・良胤（一二一一～一二九一）・宝篋（一二二七〇頃）・道範（一一七八～一二五二）・実尋（一二〇六～一二七七）・定清に相承されている。この中の定清¹⁷のながれを継いだのが槇尾流であり、このことから同流は「金三流槇尾方」や「実三流槇尾方」とも称されている。先にも述べたとおり、我宝はこの法流を浄宝・頼宝・道我の三人を中心として、清我と性印にも授けている¹⁸。

・浄宝から泉宝への伝授

浄宝からの受法について、『泉宝僧都事実』¹⁹には「随浄寶上人。受三寶院流之灌頂²⁰」とあり、『雑々見聞抄』²¹巻四の紙背文書には「泉寶 初隨頼寶法印、學眞言教相、隨淨寶上人、受三寶院流灌頂²²」と、三宝院流の灌頂を浄宝から受けたことが記されている。また、栄海が泉宝入壇の際に記録した『泉宝入壇記』にも、

貞和二年二月八日、於勸修寺慈尊院、有傳法灌頂事、受者東寺定額泉寶律師也、彼仁本隨神護寺槇尾淨寶上人故我寶上人自性房弟子、灌頂弟子也、教相屬故頼寶法印也²³

とあり、泉宝は浄宝の灌頂弟子であると記されている。よって浄宝の法流相承を考慮すると、泉宝が受法したのは「金三流槇尾方」であると推察できる。浄宝の下での灌頂を記した史料や伝授に関わる次第類等は存在しないが、暦応三年（一二三〇）に記した『属星供復本命供並一夜作法』には、

本云 建久三年二月九日於八条亭以御房御本書之此又令作造仁和寺御室給書也金剛佛

子静遍之本也 承元三年正月十九日於禪林寺常住院書寫之 求法末學實賢

曆三年庚辰三月一日巳刻於東寺西院僧坊中部屋書寫畢 權律師杲寶²⁴

とあり、実賢の書写本を杲宝が写していることが確認できる。いずれにせよ、浄宝からの授法については不明瞭な点が多いが、ここでの考察をまとめると以下のようなになる。

・浄宝上人(頼堅)は我宝の高弟の一人であり、我宝について最御崎寺の寺務に就いて槇尾山平等心王院に住した人物である。頼宝・道我と共に我宝最後の面授の一人。

・杲宝は浄宝の灌頂弟子であるが、浄宝の法流から判断すると、杲宝は「金三流槇尾方」を受けたと考えられる。

二、道我からの受法

・道我について

道我は藤原俊業の子で栄海の実弟である。²⁵ また、道我は二条派の歌人として後宇多院の信任を得ていたようで、頼阿や兼好とも親交があった。²⁶ 道我について『伝統広録(伝統広録)』巻八下には、

同二長者聖不動院大僧正道我傳或作雅

長者名道我。曰大納言僧正。今出川皇后篤信教之。弘安六年八月十三日於北山西園寺三身堂。請僧正剃縁髮出家。

時三十三。授名佛性覺矣⁽²⁷⁾

と略伝が記されているが、これによると弘安六年（一二八三）に三三歳にて出家したことが記されている。道我の出家は決して早くなかったが、先にも述べたとおり、道我は我宝の下で学んだ僧で、頼宝や浄宝と共に我宝最後の面受者となる。このため道我は、呆宝の師となる頼宝や浄宝と兄弟弟子となるので、呆宝との交流もあったことが推察される。呆海が呆宝入壇（勸修寺流慈尊院方）の際に記した『呆宝入壇記』には、

貞和二年二月八日、於勸修寺慈尊院、有傳法灌頂事、受者東寺定額呆寶律師也、彼仁本隨神護寺楨尾淨寶上人故我寶上人性房弟子、灌頂弟子也、教相屬故賴寶法印也、積鑽仰之功、事相教相多年稽古、諸人依學其教義、隨分名譽之人也、當流事、隨故聖無動院僧正道我、雖傳受、未及委曲、仍爲窮其微致、有入壇之望、仍聽許也⁽²⁸⁾

と、呆宝が道我に随つて勸修寺流を受法していたことが記されている。また本文に「故聖無動院僧正」とあるが、『東寺王代記』に「二康永、十月十九日、道我僧正圓寂、年六十⁽²⁹⁾」と示されるように、道我は康永二年（一二三三）一月一九日に入寂している。

・道我の法流

道我の法流について史料を調査すると、呆宝撰『血脈鈔野沢』（仁和御流）には、

○前大僧正禪助付法内

顯譽僧正寶持院 實弘僧正威徳院 禪圓僧正寶幢院 顯助僧正眞光院 禪秀僧正教王院 益守僧正成就院 道我僧正聖無

動院 有助僧正佐々目 成助僧正眞光院⁽³¹⁾

と、禅助（一二四七～一三三〇）⁽³²⁾の付法として道我の名を確認できる。さらに『野沢血脈集』巻二（勸修寺流慈尊院方）には、

慈尊院流 勸修寺或血脈云。是自嚴覺下出。勸修寺末流自興然之代云慈尊院流也云々（中略）

嚴覺—良勝阿闍梨。慈尊院慈尊院蓮華房—實任阿闍梨大法房—興然阿闍梨慈尊院—榮然阿闍梨同流—榮尊權僧正同院—聖濟僧正同院—榮海僧正同院—道我僧正⁽³³⁾

というように、栄海より同流を授かたことが示されている。これらの記述によれば、道我は仁和御流と勸修寺流慈尊院方、また先に述べたように、我宝より「金三流榎尾方」を相承していたことになる。

・道我から杲宝への伝授

道我から杲宝に対する伝授は、特に暦応三年～四年（一一三四〇～一一三四一）にかけて行われている。それらは『秘鈔聞書』などの醍醐系統に由来するものであり、杲宝に対する道我の伝授は「金三流榎尾方」に基づくものであったと推察される。

道我の伝授が最初に行われたのは、暦応三年一月二五日に二条壇所にて行われた『宝生法口決』⁽³⁴⁾と『秘鈔聞書』⁽³⁵⁾の伝授であるが、『秘鈔聞書』の奥書には「聖無動院（道我僧正）口決也」と記されており、これが道我の口決本を基にした伝授であることがわかる。『秘鈔』は守覚法親王（一一五〇～一二〇三）が醍醐系統の事相の秘事を類聚したものであるから、道我からの伝授は醍醐系統に由来するものであったと思われる。しかしながら、それ以上の詳細は

一向に不明瞭である。この伝授の後、杲宝は暦応四年頃まで主に三寶院流系統の聖教を書写しているが、それらの聖教は道我の書写本であることが多い。

おそらく杲宝は、道我から醍醐系統に由来する法流、特に「金三流槓尾方」に基づくものを主に受けて、その伝授の中には、先に挙げた『杲宝入壇記』の記述のように、勤修寺流慈尊院方に関するものもあつたのではないかと思われる。

三、栄海からの受法

・栄海について

栄海（一二七八～一三三七）は、慈尊院聖濟（一二七四頃）の弟子で勤修寺慈尊院第六世となつた人物であり、また東寺第一二二代の長者となつている。栄海と聖濟について『伝灯広録（伝灯広録後）』巻一には、

慈尊院五世權僧正聖濟傳

僧正名聖濟。得榮尊瀉瓶而作慈尊五世。詔爲高雄山神護寺別當。付法二人榮海榮紹

不詳

東寺百二十一代長者法務慈尊院六世大僧正榮海傳

大僧正名榮海。入聖濟之室而出家。敲諸方之關善學性相住無動寺聞台教。後嗣本師伝燈薰慈尊六世之席。詔爲東寺百二十一代長者法務。任大僧正。壯年好達和歌聲名播集矣。元應帝國師受印可。海廻獻印璽（中略）付法二人。

分燈一人俊然僧都 寬胤傳有下 元應帝分受³⁷

とある。これによると、栄海と栄紹は共に聖済の付法であり、さらに栄海は聖済の下で出家していたことがわかる。また、栄海は和歌等を得意として、後醍醐天皇の勅により国師となっている。付法には俊然と寛胤があり、さらに「分受」という形式で後醍醐天皇に法を授けたことが記されている。『伝灯広録（伝灯広録後）』で「分受」と表現しているのは、これが出家者ではない者に授けた「俗体灌頂」であったからだと思われる。

法の授受は、本儀的に俗人に行われることは無いのだが、当時、天皇には「即位灌頂」という形式によって授けられていた経緯がある。⁽³⁸⁾例えば、「即位灌頂」の確実な初見とされるのは、伏見天皇（一二六五～一三一七）の事例があり、その子である花園天皇（一二九七～一三四八）にも、即位以後であるが即位灌頂の印明が授けられている。⁽³⁹⁾しかも花園天皇の場合には、讓位後、出家以前に伝法灌頂が授けられていた形跡がある。⁽⁴⁰⁾上述の点について、真木隆行氏は「後宇多天皇の密教受法」において詳しく研究されているが、真木氏は先の天皇家における「即位灌頂」について言及され、

後醍醐天皇のみならず、鎌倉後期の王権と密教との関わり方自体が既に特異だったと言える。更に、俗体の王権と密教との関わりという点においても、それは後醍醐の専売特許とは言えない⁽⁴¹⁾

と、後醍醐天皇の受法のみが特異なものであったとは言えないと結論付けられている。これに対して、佐藤愛弓氏は「慈尊院栄海の活動と言説——『真言伝』の編纂まで⁽⁴²⁾——」において、栄海からの後醍醐天皇の受法について、

しかし俗人である後醍醐天皇に印可を授けるといいうのは、それが許可印信のレベルであっても異例のことといわざるをえない⁽⁴³⁾

と、やはり後醍醐天皇の受法は異例であると述べられている。このようにその受法の捉え方について意見が分かれるところであるが、栄海が後醍醐天皇に印可を授ける以前より、天皇家において「即位灌頂」は行われていたようであり、天皇家の権威誇示において、それは極めて重要な役割を果たしていたと考えられる。

・栄海の法流

栄海の法流である勸修寺流慈尊院方は「興然(一一二〇)～(一一二〇三)―栄然(一一七二)～(一二五九)―栄尊(一二八七頃)―聖濟―栄海⁽⁴⁶⁾」と相承するものであり、この相承の基となる興然について、『伝灯広録(伝灯広録後)』巻二(興然の条項)をみると、

勸修寺慈尊院二世學講興然傳

學講名興然。字理明。仁平三年十二月十八日從念範受傳法灌頂。保元二年二月十日得重位於實任⁽⁴⁷⁾

とある。これによれば、興然は仁平三年(一一五三)二月一日に念範(一一〇八七頃)の下で伝法灌頂を受け、さらに保元二年(一一五七)二月十日に実任(一〇九七～一一六九)の下で重受している。この受法について『伝灯広録(伝灯広録後)』巻二(実任の条項)と(念範の条項)をみると、

勸修寺大法坊阿闍梨學講實任傳

阿闍梨名實任。字大法。得勝公之瀉瓶雖聲價時高無曲記不審。付法八人。能覺相應院 未詳 興然慈尊院瀉瓶 尊實

字慧鏡 寬泉 仁禪⁽⁴⁸⁾

山州安祥寺已講念範傳

已講名念範。字大進。安祥寺宗意之上足也。性相台教善學得還來受本師密灌。繼禮嚴覺得燈光。後敲勸修門。佩
寫信印傳法訖在安祥。勸修之間轉祕輪付法六人 觀祐未詳 興然見前 尊海不詳 源基同 智海仁濟高野⁴⁹

と、実任と念範の付法に興然の名を確認することができる。これについて筑波常遍師の『勸流伝授前談』には、

理明房興然は「慈尊院次第」によると、仁平三年（西暦一一五三）二月一八日に念範より伝法灌頂、保元二年
（西暦一一六二）十二月十日に実任より重位⁵⁰

と、念範・実任（重位）からの伝授が指摘されている。実任からの受法としては、先の『伝灯広録後』巻二に「興然
慈尊院瀉瓶」とあるように、興然が実任の正嫡となったことが確認できるが、筑波師の指摘によれば、これは重位で
あったようである。さらに、この慈尊院方の相承について『野沢血脈集』巻二には、

慈尊院流 勸修寺或血脈云。是自嚴覺下出。勸修寺末流自興然之代云慈尊院流也云々（中略）

嚴覺 良勝阿闍梨。慈尊院蓮華房 實任阿闍梨大法房 興然阿闍梨慈尊院 榮然阿闍梨同流 榮尊權僧正同院 聖濟僧正同院
榮海僧正同院 俊然僧正同院

道我僧正
後醍醐院
定譽法印
果實法印 賢寶法印⁵¹

と、杲宝までの相承として「嚴覺（二〇五六～一二二二）—良勝（一二二〇頃）—実任—興然—榮然（一二七二～一二五九）—榮尊（一二八七頃）—聖濟（一二七四頃）—榮海—杲宝」が示されている。また「念範—興然」の相承について『野沢血脉集』巻二には、

安祥寺諸流一統血脉云

嚴覺—寛信—念範—興然—榮然—榮尊—聖濟—榮海—杲寶—賢寶⁵²

と、勸修寺相承の安祥寺流として「嚴覺—寛信（一〇八四～一一五三）—念範—興然—榮然—榮尊—聖濟—榮海—杲宝」という血脉が示されている。おそらく、興然より以下の慈尊院方の相承においては、慈尊院方と念範方が兼伝さされていて、榮海もそのながれを相承していたものと思われる。

・榮海から杲宝の伝授

杲宝は貞和二年（一三四六）二月八日に榮海の下で伝法灌頂を受けるが、その前年の貞和元年（一三四五）には榮海の下での受法を開始しており、四〇歳～四二歳までの間、膨大な数の伝授とそれに関する次第類の書写が行われている。それは、貞和元年（一三四五）四月の『聖教目錄』⁵⁴の書写を皮切りとして、勸修寺慈尊院や高雄慈尊院を中心に伝授・書写が行われており、書写本については、ほとんどが榮海の伝授本や榮海から賜った本となっている。特に伝法灌頂が行われた貞和二年（一三四六）には、数多くの次第類が書写されており、榮海の杲宝に対する入れ込み具合が窺えるものとなっている。また伝授次第の中には興然の自筆本もあり、榮海が慈尊院方の根底まで余すことなく伝える努力をしていたことがわかる。榮海は貞和三年（一三四七）八月一六日に入滅するが、杲宝に対する伝授は貞和三年八月まで、『別尊法賢然集』（八月三日）⁵⁵や『目録勳』（八月四日）⁵⁷のように行われており、榮海はまさに入寂する

その直前まで、杲宝に伝授していたことになる。この杲宝に対する多数の伝授は、栄海の大きな期待であって、栄海のすべてを注ぐ渾身のものであったといえる。⁽³⁸⁾

四、性心からの授法

・性心について

杲宝の晩年の師として知られる性心であるが、その生涯や人物像について詳細はあまり知られていない。性心について、櫛田博士は「性心は始め、尊塔と号し、後に教覚性心と改めたが、生馬大聖竹林寺に止住した仁和寺流の相承者である」と述べられ、『灌頂印明』を論拠として、性心の法流と杲宝との関係について言及されている。しかし、そこでは性心の生涯について詳しい論究はなされておらず、また生涯に関する先行研究もほとんどないことから、まだ性心の詳細を知るには至っていない。

性心が書写した聖教に『許可略支度』があり、また校合したものに『仁王経法記』の奥書がある。そこには、

・『許可略支度』の奥書

康永元年六月八日於深草金剛壽院書寫畢 作者可尋之 沙門性心⁽³⁹⁾

・『仁王経法記』の奥書

弘安二年十一月以師主律師御本書寫了 金剛乘佛子證禪中觀上人 康永元年九月三日 於金剛壽院校合畢 佛子性心⁽⁴⁰⁾

と、性心が康永元年（一三四二）頃に深草金剛寿院に住していたことが記されている。この深草金剛寿院は、光厳天皇（一三一三～一三六四）が住した寺院であり、性心は五十代頃まで、この金剛寿院に活動拠点を置き、晩年に竹林寺に拠点を移したと思われる。なお、光厳天皇が深草金剛寿院に入寺したのは延文二年（一三五七）のことであり、性心は文和元年（一三五二）頃には竹林寺に入寺していたので、両者は入れ替わるような形で深草金剛寿院を出入していると思われる。

・性心の法流

櫛田博士は『灌頂印明』を論拠として、仁和寺流の相承者として性心を挙げている。それを示すと、

文永十二年正月九日授頼助法印⁶²一畢 沙門法助

弘安十年八月廿一日奉^レ授^二上乘院宮^一一畢 権僧正頼助

文保元年五月十五日授^二教寛房^一一畢 沙門益性

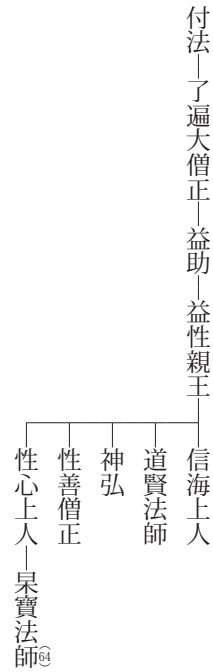
文保三年十二月八日授^二杲宝僧都^一一畢 性心

応安四年八月六日授^二賢宝僧都^一一畢 本円

康応二年三月廿二日授^二融然僧都^一一畢 法印権大僧都賢宝⁶³

となる。これは「法助（一二二七～一二八四）―頼助―益性―性心―杲宝」という相承を示すものであるが、『灌頂印明』の典拠を示す注記が無いので、これが何に由来するものか、櫛田博士の論文からは窺い知ることが出来ない。また、櫛田博士は『野沢血脈集』巻三に示される、

第二十四。法助准三后（中略）



という、「法助―了遍（一二二四）―二二二一）―益助―益性―性心―泉宝」という血脈を挙げられ、これを仁和寺流の相承を示すもう一つの根拠とされている。この血脈は、広沢流仁和寺系統の法流であると思われるが、詳しいことは定かではない。

そこで性心の相承に関する史料を調査したところ、性心が草した『瑜祇秘要決』に詳細を確認できる記述があることがわかった。『瑜祇秘要決』巻十二の本奥書には、

此抄全部十二卷且、任故遍照寺二品親王益性ノ御遺令^二且、依東寺ノ定額泉寶僧都ノ有懇望^二乍憚恐^レ詮管見記所聞令荒草訖 但シ文句繁雜未勘是多^シ早^ク糺義理被勘未決者愚意ノ所欣也 延文二年七月六日 老比丘性心年七十一⁶⁵

と、延文二年（一三五七）七月に、性心が益性の御遺令に任せて、また泉宝の懇願によってこれを草したことが記されている。さらに同書の書写奥書には、

應永三十一年五月四日 益信―寛平―寛空―寛朝―濟信―性心（信）―寛助―覺法―寛性―守覺―道法―道助―

道深 法助―頼助―益助―上乘院宮僧正―益性―性心遍照寺宮又云下川原―泉寶法師己上一部十二帖或請他筆或拭老眼九
ヶ年之間漸終寫功了矣 法印權大僧都堅能年六十三⁽⁶⁶⁾

と、応永三一年（一四二四）に堅能が『瑜祇秘要決』の相承を記している。ここには「法助―頼助―益助―益性―性心―泉寶」という相承が示され、さらに性心の割注には「遍照寺宮又云下川原」とあり、性心が「遍照寺宮」と称されていたことが記されている。この記述によれば、性心は公家に近い存在であつたと推察される。

以上、性心の法流について述べてきたが、櫛田博士が提示された史料と、『瑜祇秘要決』に示される相承を合わせてみると、性心の相承は、基本的に法助からはじまつて「益助―益性―性心」という付法が基準となつている。法助は仁和寺第一〇世であり、その付法には性仁（一二六七―一三〇四）や了遍、また後宇多法皇や道我の師となる禅助等が名を列ねる法将である。また了遍に関しては、菩提院行遍（一一八一―一二六四）に師事して菩提院流祖となつた人物で法助には重受している。さらに、嘉元三年（一三〇五）に龜山上皇に灌頂を授けた僧としても知られている。また益性について、以下の史料にその出自が記されている。⁽⁶⁸⁾

・ 『諸門跡譜』

上乘院 益性法親王二品 龜山院皇子、後嵯峨院孫、益助僧正資⁽⁶⁹⁾

・ 『釈家官班記』

二品親王 仁遍照院益性龜山院第十九世皇子、教範僧正弟子、康永二三四敍、元無品⁽⁷⁰⁾

・ 『華頂要略』 諸門跡伝六（上乘院）

益性法親王、龜山院第十九皇子、益助僧正資、康永二年敍二品、號遍照院宮⁽⁷¹⁾

これらの史料によると、二品法親王である益性は、龜山天皇（一二四九～一三〇五）の第十九子であり、「仁和寺遍照院宮」と号したことが確認できる。また師として「教範」と「益助」の名が挙げられているが、益助は先の血脈のとおり、法の授受が行われた師である。益性と性心の関係について詳細は不明であるが、性心の受法した仁和御流は、基本的に法助を通じた相承であることが確認できる。

・性心から杲宝の伝授

杲宝は竹林寺に文和元年（一一三二）二月に入寺するが、この際に性心より『権少僧都法眼和尚位杲宝授印可』を授かっている。同書の奥書には、

右於生馬大聖竹林寺灌頂道場授兩部印可畢 正平七年歲次壬辰二月廿日尾宿火曜傳授大阿闍梨性心⁽²⁾

とあり、この時に性心の下で伝法灌頂を受けて兩部印可を授かっていることがわかる。この伝授は、先に示した「益助―益性―性心」という血脈に則るものと思われるが、これまでの杲宝は、小野流を基本とする授受がほとんどであったので、性心からの広沢流系統の伝授は、杲宝の法流受法の大きな転機になったと思われる。

むすびに

以上、杲宝の受法した法流とその師について論じてきた。最後に、諸師より相承したと思われる法流をまとめると以下のようになる。

①浄宝からの相承……金三流榎尾方

・ 泉宝は「実賢―定清―定融―我宝」という相承に基づき、「金三流榎尾方」を相承していると推察される。泉宝の師弟関係（教相の師↓頼宝、事相の師↓浄宝）によれば、泉宝の出発点は我宝の事教二相となる。

②道我からの相承……三宝院流（金三流榎尾方か）と勸修寺流慈尊院方

・ おそらく泉宝は、道我からまず醍醐系統の三玉院流を受け、その後「泉宝入壇記」の記述のように「実任―興然―栄然―栄尊―聖濟―栄海―道我」という相承に基づき、勸修寺流慈尊院方に關する受法があったと思われる。

④栄海からの相承……勸修寺流慈尊院方

・ 勸修寺流慈尊院方は、興然より以下の相承にて、慈尊院方（実任―興然―栄然―栄尊―聖濟―栄海―道我）と念範方（念範―興然―栄然―栄尊―聖濟―栄海）が兼伝されている。泉宝にとつて栄海からの受法は、その生涯において極めて重要な事跡である。

⑤性心からの相承……法助に基づく仁和御流系統の法流

・ 性心は龜山天皇の皇子である益性より、仁和御流の系統で法助が基準となる「益助―益性―性心」という相承を受けている。泉宝が受けた伝法灌頂もこの相承によると推察されるが、これまでの泉宝は、浄宝・道我より三宝院流、道我・栄海より勸修寺流慈尊院方を受けるといふ小野流の授受が基本であった。性心からの受法は、泉宝の法流受法の大きな転機になったといえる。

この中で泉宝が受法した浄宝と道我は、頼宝と並ぶ我宝の高弟であり、真言僧泉宝の基点となる人物であったと考えられる。また泉宝が栄海の下で受法した時期は、東寺の中核を担う重要人物として活躍をはじめた頃である。後に泉宝が開基となる勸智院にて、院主が代々勸修寺流を相承していくことを考慮すると、栄海の下での受法は、泉宝の事相受法において最も重要な事柄であったと考えられる。また泉宝は、栄海への受法に先立って道我に勸修寺流を受

法しており、勸修寺流受法のきっかけは道我にあつたと推察できる。東寺で活躍する杲宝にとって、道我は大きな影響を与えた師の一人であり、杲宝研究において注目すべき人物であるといえる。

以上、杲宝の事相について、今回は杲宝の事相受法の傾向に論点を絞って言及した。しかしながら杲宝の事相に関しては、その実践内容を含めてまだまだ不明瞭な点が多々ある。この解明は今後の課題としたい。

註

- (1) 杲宝に関する最近の先行研究は、千葉正氏が「杲宝説『伝法記』と『開心抄』——杲宝の禅宗批判の教学的背景——」（『印仏』五九巻二号、二〇一一）や「杲宝撰『菩提心論聞書』の禅宗理解について」（『印仏』五八巻二号、二〇一〇）、「杲宝撰『大日経疏鈔』における禅宗理解」（『印仏』五七巻二号、二〇〇九）というように継続的に発表をされているが、それ以外はほとんど見当たらない。また史学的見地からは、櫛田良供博士『続真言密教成立過程の研究』（昭和五四年発行）や橋本初子「東宝記」（『日本の仏教』二一三）、小久保和夫「東宝記と杲宝」（『国宝東宝記 原本影印』昭和五七年発行）等が挙げられるが、こちらもそれほど多くないのが現状である。特に事相面に関する研究はほとんど成されていないが、わずかに櫛田博士が杲宝の事相受法について、『続真言密教成立過程の研究』（三二二頁）にて性心からの受法について言及され、また我宝・頼宝・浄宝の法流について言及されている。しかしながら、それ以外の受法については概要のみであり触れられていない。また杲宝の師にあたる道我について、道我と学衆方荘園について言及した網野善彦氏の『中世東寺と東寺領荘園』（一九七八年発行、東京大学出版会）があるが、ここでは道我の動向については詳細に触れているが、事相の動向、また杲宝との関連などは触れられていない。

- (2) 『大日本史料』六篇、二四冊、三八四頁
(3) 『大日本史料』六篇、二四冊、三八四頁

- (4) 我宝は自身が臨終するまでの七日間、浄宝(頼堅)・頼宝・道我の三人にのみ二一カ条の秘決を授けたとされている。詳しくは櫛田良供博士『続真言密教成立過程の研究』(二八九頁)を参照されたい。
- (5) 『金剛峯寺諸院家析負輯』は全十巻で構成されており、天保年間に編集された史料である。その内容は、高野山上各寺院の過去帳や古文書等を中心に構成されており、高野山上において活躍した僧の伝記等が詳説される。詳しくは『続真言宗全書』(解題)巻四二、一六九頁を参照されたい。
- (6) 『続真言宗全書』巻三四、二三八頁
- (7) 『紀伊統風土記』巻四(『続真言宗全書』巻三七、三七頁)を参照。
- (8) 『東宝記』は、巻八の奥書に「右依仁和寺宮仰、一部六卷特分爲八卷草之、再治□□□備上覽者也 貞和五年己丑五月廿三日」(『大日本史料』六篇、二四冊、二〇九頁)とあるように、仁和寺宮の依頼により貞和五年に草稿されたことが記されている。なお、後に賢宝がこれを補記している。
- (9) 『続々群書類従』巻一二、一二三頁
- (10) 我宝の『般若心経秘鍵』を講じたことが「伝法会」のきっかけとなったことについては、上高有氏『東寺・東寺文書の研究』(一九九八年発行、思文閣、五六頁)においても指摘されている。
- (11) 『伝灯広録』は広範に亘る真言宗の高僧伝であり、内題によると「大毘盧遮那無上正宗伝統広録沢」八巻、「金剛頂無上正宗統伝灯広録」一三巻、「金剛頂無上正宗伝灯広録後」五巻の三編二六巻で構成される。撰述者は祐宝(一六五六〜一七二二)であり、著述年代は元禄〜宝永年間と推定されている。詳しくは『続真言宗全書』(解題)巻四二、一五九頁を参照されたい。
- (12) 『続真言宗全書』巻三三、一四九頁下段
- (13) 本書は、野沢両流の血脈をまとめたもので作者は不明である。著作年代についても不明瞭であるが、『続真言宗全書』(解題)巻四二、二七二頁によると「徳川末期寛政八年直前の作と見るべきである」と推定されている。

- (14) 『真言宗全書』卷三九、一〇八頁上段
- (15) 『統真言密教成立過程の研究』(二八九頁)を参照した。
- (16) 「金剛王院流」について、杲宝の『血脈鈔』には「實賢時兼被習三寶院故常金剛王院方三寶院云也(中略)實賢被受勝賢僧正法流也。」(『統真言宗全書』卷二五、九三頁上段)とあり、「勝賢—実賢」のながれを「金剛王院方三寶院」とすると述べている。
- (17) 定清について『血脈類集記』卷一一には「權僧正定清 付法 于時法印權僧正號大門寺(以下、裏書) 定清事 忍辱山大僧正定豪灌頂資 金剛王院大僧正實賢灌頂資重受 權僧正 鎌倉丈六堂寺務 後藤大夫判官基清子也 號大門寺僧正」(『真言宗全書』卷三九、二三〇頁下段)と、定清の略歴と実賢の灌頂資であることが記されている。
- (18) 詳しくは『密教大辞典』(巻七、二〇三三頁)の「槇尾流」の項を参照されたい。
- (19) 『杲宝僧都事実』は、本文に「右以杲快僧上之口授、舊記之概見寫畢」(『統群書類従』(伝部)卷九上、一二二頁)とあるように、何者かが東寺觀智院第十二世杲快の口授に従って、旧記から大体の様子を写したものである。杲快は、江戸期に東寺の伽藍再興に尽力した僧で、觀智院院主となつて大々的な再建を行っている。この再建は、蔵の造営から着手され、延宝六年(一六七八)に「北経蔵(宝蔵)」を建立、元禄五年(一六九二)には「南経蔵(金剛蔵)」が再建される。この後、杲快は貞享三年(一六八六)に表門(西門)の修理を行い、南門・庫裡・築地を次々と建立している。おそらく『杲宝僧都事実』もこの頃に著述されたと考えられる。
- (20) 『統群書類従』(伝部)卷九上、一二二頁
- (21) 『雑々見聞抄』は、貞和年間に杲宝が書き記した聞書類である。『雑々見聞抄』卷七の奥書には「貞和四季四月二十三日於東寺西院僧坊隨見聞記之訖 外見尤有憚且可恥且可祕矣 權少僧都杲寶」(『東寺觀智院金剛蔵聖教目録』卷四、九一頁)とある。
- (22) 『大日本史料』六篇、二四冊、一五六頁

- (23) 『大日本史料』六篇、二四冊、一五四頁
『観智院目録』卷一一、一二四頁
- (24) 『尊卑文脈』（藤氏六上、内麻呂公孫）には、信業・栄海・道我の三兄弟が僧侶となったことが示されている（『大日本史料』六篇、一〇冊、八一七頁）。
- (25) 道我と兼好の関係を指摘する先行研究として、稲田利徳氏「兼好と道我の贈答歌——「兼好自撰家集」の一齣——」（『和歌文学研究』六六号、一九九三年発行、三七頁）、林瑞栄氏「兼好と道我——二つの贈答歌の「解釈」——」（『文芸研究』一〇五号、一九八四年発行、五三頁）がある。
- (26) 『続真言宗全書』卷三三、三三五頁上段
- (27) 『大日本史料』六篇、二四冊、一六四頁
- (28) 『大日本史料』六篇、七冊、七四六頁
- (29) 『血脈鈔野沢』は杲宝撰述であり、著述年代が不明である（『続真言宗全書』卷三三、五九頁）。なお、『続真言宗全書』卷二二では、宝暦五年（一七五五）の写本が底本として用いられている。
- (30) 『続真言宗全書』卷二三、七〇頁
- (31) 禅助は宝治元年（一二四七）に、内大臣洞院通成の子として生誕して、菩提院了遍の元に入室する。真光院前大僧正と称され、仁和寺法助（一二二七〜一二八四）に随って出家して、文永二年（一二六五）に伝法灌頂を受けて仁和御流を相承している。また永仁二年（一二九四）には東寺一長者に就き、応長元年（一三一一）仁和寺別当となつている。また神護寺別当・伝法院座主も歴任した当代きつての高僧である。また禅助は後宇多法皇の信任が厚く、徳治二年（一三〇七）七月の嵯峨寿量院における法皇出家の際には戒師として出仕している。この褒賞として、後宇多法皇は同年十二月に禅助を東寺一長者法務に補任している。以上の内容については『仁和寺諸院家記』（『仁和寺史料』寺史編一、奈良国立文化財研究史料、第三冊）に詳しい。また禅助と仁和御流の研究に

- ついで、横内裕人氏の「仁和寺と大覚寺——御流の継承と後宇多院——」（『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究・論文篇』一九九八年発行、勉誠社、四一七頁）が詳しい。
- (33) 『真言宗全書』巻三九、四〇〇頁上段
- (34) 奥書には「曆應三年正月二十五日於二条壇所傳受畢傳受次賜御抄略出要所者也權律師杲寶」（『観智院目録』巻三、二九〇頁）と記される。
- (35) 奥書には「曆應三年正月二十五日於二条壇所傳受之畢以傳受次賜御抄々出要所畢杲寶」（『観智院目録』巻一九、二六一頁）と記される。
- (36) 『観智院目録』巻一九、二六一頁
『統真言宗全書』巻三三、二四六頁上段
- (37) 「即位灌頂」に関する先行研究としては、上川通夫氏「中世の即位儀礼と仏教」（『日本史研究』三〇〇号、一九八七年発行）や阿部泰郎氏「宝珠と王権」（『岩波講座東洋思想』巻一六（日本思想二）、一九八九年発行、岩波書店）等がある。
- (38) 『伏見天皇宸記』（『史料大成』正応元年三月一五日の条項）
- (39) 『花園天皇宸記』（『史料纂集』文保元年五月一八日の条項）
- (40) 岩橋小弥太氏『花園天皇』（一九六二年発行、吉川弘文館）を参照されたい。
- (41) 真木隆行氏「後宇多天皇の密教受法」（『古代中世の社会と国家』一九九八年発行、清文堂）
- (42) 「後宇多天皇の密教受法」（『古代中世の社会と国家』、四七九頁）
- (43) 佐藤愛弓氏「慈尊院栄海の活動と言説——『真言伝』の編纂まで——」（『勧修寺論輯』二号、二〇〇五年発行）
- (44) 「慈尊院栄海の活動と言説——『真言伝』の編纂まで——」（『勧修寺論輯』二号、一六頁）
- (45) 『野沢血脉集』巻二、慈尊院流の条項を参照（『真言宗全書』巻三九、四〇〇頁上段）。
- (46)

- (47) 『統真言宗全書』 卷三三、四九四頁下段
- (48) 『統真言宗全書』 卷三三、四九四頁上段
- (49) 『統真言宗全書』 卷三三、四九九頁上段
- (50) 『勸流伝授前談』 (平成六年発行、燈影舎、八四頁)
- (51) 『真言宗全書』 卷三九、四〇〇頁上段
- (52) 『真言宗全書』 卷三九、四〇一頁上段
- (53) 栄海の下での伝法灌頂の様子については、拙稿「臬宝の事相受法について」(『豊山教学大会紀要』四〇号、二〇一二年三月発行)にて、『臬宝入壇記』を中心に論じているのでそちらを参照されたい。
- (54) 『聖教目録』 奥書「康永四年四月七日於勸修寺慈尊院書寫訖 權律師臬宝」(『観智院目録』 卷一七、二二五頁)
- (55) 栄海の入滅について『神護寺交衆任日次第』に「榮海潤七月二日陀羅尼初參(中略)貞和三年丁亥八月十六日申終、於勸修寺慈尊院端坐結印、口誦眞言數返之後入滅云々、年七十」(『大日本史料』 六篇、一〇冊、八一五頁)とある。
- (56) 『別尊法 賢然集』 奥書「貞和三年八月三日一部四卷授臬寶僧都了 榮海」(『大日本史料』 六篇、二四冊、一九〇頁)
- (57) 『目録勸』 奥書「已上作法貞和三年八月四日悉以授臬寶僧都畢 榮海」(『大日本史料』 六篇、二四冊、一九〇頁)
- (58) 栄海からの受法について、その概要は櫛田良洪博士『統真言密教成立過程の研究』三〇五頁にも示されてある。こちらにも参照させて頂いた。
- (59) 『統真言密教成立過程の研究』(二二三頁)
- (60) 「観智院金剛藏聖教」一二三箱―一七
- (61) 「観智院金剛藏聖教」二七〇箱―一一
- (62) 『御擧状等執筆引付』には「十八日(延文二年二月)、癸亥、光嚴法皇、崇光上皇、及び直仁親王、河内金剛寺ヨリ、京都ニ還御シ給フ、法皇ハ深草金剛壽院ニ、上皇ハ伏見殿ニ移御シ給フ」(『大日本史料』 六篇、二二冊、二二二

頁)と、延文二年(一三五七)に光厳天皇が金剛寿院に入寺した旨が記されている。なお、光厳天皇の動向については、中村直勝氏「光厳天皇」(『歴代天皇紀』中村直勝著作集、巻六、一九七八年発行、淡交社)、岩佐美代子氏「光厳天皇・その人と歌(第三〇号記念)」(『駒沢国文』三〇号、一九九三年発行、三頁)を参照した。

(63) 『続真言密教成立過程の研究』(二一三頁)

『真言宗全書』巻三十九、四二七頁下段

(64) 「観智院金剛藏聖教」別箱二一一

「観智院金剛藏聖教」別箱二一一

(65) 『伝統広録』巻八之下(『続真言宗全書』巻三三、三三二頁上段)の法助の条項を参照。また禪助との関係について

では、前掲の横内裕人氏「仁和寺と大覚寺——御流の継承と後宇多院——」(『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究・論文篇』)が詳しい。

(66) 『伝統広録』巻八之下(『続真言宗全書』巻三三、三三三頁下段)の了遍の条項、および『密教大辞典』縮刷版、二二八七頁を参照。

(67) 『大日本史料』六篇、一七冊、一九六頁

『大日本史料』六篇、七冊、五七六頁

(68) 『大日本史料』六篇、七冊、五七六頁

『大日本史料』六篇、七冊、五七六頁

(69) 『大日本史料』六篇、二四冊、一九二頁

(70) 『大日本史料』六篇、二四冊、一九二頁

(71) 『大日本史料』六篇、二四冊、一九二頁

(72) 『大日本史料』六篇、二四冊、一九二頁

沼尻憲尚氏 学位請求論文要旨（課程博士）

「真言僧具呆宝の研究」

本論は、鎌倉後期～南北朝期の東寺教学を支えた呆宝に関する研究をまとめた。呆宝は「東寺の三玉」と称賛されているが、生涯・思想を含めた包括的な研究は進んでおらず、呆宝という真言僧の全容はまだまだ解明されていない。そこで本論では、第一篇「呆宝の生涯」、第二篇「呆宝の教相と事相」という二篇より論及した。

第一篇の第一章では、生涯を論ずるにあたって、呆宝の事績を記載する史料を採り上げて生涯を概観した。この結果、呆宝の生涯は三期（元亨三年～建武二年・建武三年～貞和四年・貞和五年～康安二年）に分けることが出来ると考えた。第二章以下、この区分けに準じて論を進めた。

第二章の第一節では、青年期の呆宝の僧名・高野山での活動拠点と人物関係、という観点から論に及んだ。第二節では、頼宝との関係、高野山から東寺に活動拠点を移していることに着目して、その動向を主に『即身義東聞記』の書写奥書から確認した。第三節では、頼宝の遷化、東寺諸行事への出仕、ということについて論及した。まず頼宝の遷化について、頼宝は元徳元年（一二二九）九月以降～元徳二年（一二三〇）二月までの間に遷化したものと確認した。頼宝の遷化以降、呆宝は師の跡を継ぐかのように東寺の行事に出仕するようになる。それは、建武二年（一二三五）一〇月二八日に行われた「仁王会」の結願において、百僧の随一として出仕したこと等が挙げられる。

第三章の第一節では、この時期の呆宝の史料を教相と事相に分類して、その書写奥書に示される内容を考察した。また第二節では、播磨国矢野庄の所務職に呆宝が補任、呆宝と談義、論義、勸修寺流受法、という三点から論及した。

第四章の第一節では、貞和五年（一二四九）頃の動向について、深源との確執を中心に採り上げた。貞和三年（一二四七）の所務職の補任以降、呆宝は管理職として尽力していたが、観応元年（一二五〇）に深源による矢野庄

の乱入事件が起こってしまふ。この時、杲宝は四五歳、人間関係に苦悩する時期であつたと考える。次に第二節では、竹林寺性心の下での受法を中心として、竹林寺本尊前にて宣誓した「十種大願」を採り上げて論に及んだ。第三節では、杲宝の入寂について考察に及んだ。杲宝は四〇歳頃から疫病を患っていたようで、後半生はまさに満身創痍だったことが確認できる。入寂に際しては、東寺の僧のみならず、勧修寺慈尊院・隨心院・泉涌寺などの僧も悲しみ、また多くの人々が弔問に訪れている。これは、杲宝の人望の高さを表す結果であつたと考える。

第二篇の第一章では杲宝書写『即身義見聞』を採り上げて論及した。まず第一節では『即身義見聞』の概要について論及し、次に第二節では『即身義見聞』巻一の翻刻と内容考察を行った。内容考察においては、題号解釈と三種即身成仏、「即身成仏」四字に対する解釈、二経一論八箇の証文に関する注釈、という点について論及した。第三節では『即身義見聞』巻二の翻刻と内容考察を行った。ここでは異本『即身成仏義』について、覚鑿・実範・重誉といった諸師が異本を真撰として扱っていることに触れ、異本は真撰であるとする強い主張がみられた。第四節では鎌倉期における『即身成仏義』の注釈書を採り上げて、その内容の比較考察を試みた。比較資料として用いたのは、道範『即身義聞書』、頼瑜『顕得鈔』、杲宝写『即身義見聞』、頼宝口・杲宝記『即身義東聞記』である。また考察については、題号『即身成仏義』に対する解釈部分を中心に論及した。

第二章では杲宝の真言教学について、特に「教主義」を中心に論じた。まず第一節では教主義の概要・変遷について論及した。次に第二節では杲宝の教主義研究について、杲宝の「教主義」に関する諸著作を採り上げて、杲宝がどのように教主義を構築し、本地身説・加持身説を提唱する諸師の教主義をどのように理解したのかを論じた。第三節では杲宝の「自証極位言説有無事」の解釈を中心に論じたが、そこには頼宝の解釈を踏襲して深化させる姿勢が見受けられた。

第三章では杲宝の禅宗理解について、まず第一節では、杲宝の禅宗理解に関する先行研究として千葉正氏の研究を挙げ、そこで問題視される点について言及した。次に第二節では鎌倉期における禅宗の変遷を確認するため、栄西・

円爾・夢窓という禅僧について概観した。第三節では、杲宝の禅宗批判の書となる『開心抄』の概要について、上巻は禅宗の主張に対する批判、中・下巻は禅宗で用いることの多い真言教理の正しい理解を示す、という構成になっていることを述べた。第四節では、『開心抄』にみる杲宝の禅宗理解を論及するため、特に上巻に示される記述からその主張を確認した。ここでは禅宗が標榜する「教外別伝」と「本分田地」に関する杲宝の見解をまとめたが、禅宗が主張する「本分田地」とは、真言宗からみれば「円明心体」の初門で、五智における大円鏡智を指すに過ぎないと杲宝が述べていることを確認した。第五節では、夢窓疎石の『夢中問答』を採り上げて、夢窓が考える「教外別伝」と「本分田地」について、また真言宗の位置付けについて論及した。この中で杲宝の主張と比較を行ったが、結果は次のようになる。

① 教外別伝について

- ・ 夢窓…直ちに本分田地（さとり）を指す教え。諸宗の禅定とは相違する。
- ・ 杲宝…禅は顯教經典により構築されたもので、顯教のながれや教えに準じている。

② 密教について

- ・ 夢窓…有相の悉地を明かす密教は「方便門」であり、それは「教内」の範疇である。
- ・ 杲宝…禅宗は顯教に属すが、密教は「声字即実相」の境地であり不共のものとなる。

③ 本分田地について

- ・ 夢窓…仏・菩薩・衆生の所依であり、それは密教の「心城」にあたる解釈している。
- ・ 杲宝…「心城」は方便観である。「本分田地」は大日如来の境界には及ばない。

第四章では杲宝の事相について触れた。まず第一節で杲宝の受法した法流について、杲宝が師事した浄宝・真海・道我・栄海・性心という諸師について論及した。次に第二節では、貞和二年（一三四六）二月八日に栄海の下で行われた伝法灌頂の様子を探るため、『杲宝入壇記』を用いて論及した。『杲宝入壇記』は、栄海が著述して杲宝に授与し

た受法日記である。考察の結果をまとめると、伝法灌頂は七日に準備、八日に三摩耶戒及び初夜、九日に後夜という運びになっており、この灌頂には、宣雅（唄、誦経導師）・栄紹（教授）・定誉（護摩）・清我・弘雅（散華）・俊然・行聖（讃頭）・栄宝（堂達）が出仕していた。この出仕者の中で慈尊院方の栄紹と俊然以外は、基本的に東寺に止住している学衆方が中心となっており、杲宝にとって身近な存在が灌頂を支えていたことがわかった。

以上、論文要旨となる。